

ミューズ No. 35 平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行：2016年6月

編集：山辺昌彦、山根和代、安斎育郎

イラスト：戸崎恵理子

事務局：戦争と平和の資料館ピースあいち 宮原大輔

住所：〒465-0091 名古屋市名東区よもぎ台2-820

Tel & Fax: 052-602-4222

アクティブミュージアム 「女たちの戦争と平和資料館」(wam) 館長 池田恵理子

「権力に対する人間の闘いとは、忘却に対する記憶の闘いに他ならない」(ミラン・クンデラ)と言われますが、日本軍「慰安婦」問題をめぐっては、敗戦から70年以上経っても、“記憶をめぐる闘い”がおさまりそうにありません。

昨年末にソウルで開かれた日韓外相会談で、両国政府は日韓「合意」が成立したとして、日本軍「慰安婦」問題の「最終的・不可逆的解決」を宣言しました。ところが被害者の声も聞かず、日本政府がこれまでの「慰安婦」否定の立場を変えずに行われたこの「合意」は、韓国の被害者や支援団体、世論から強い反発を受けています。wamを含む日本の支援団体や歴史研究者たちも、「これでは問題解決にはなりません」と批判を強めていますが、日本のメディアの多くは「合意」を評価し、「一件落着」としています。こうした受け止め方の違いは、かつての戦

争を「アジア解放の聖戦」として憲法改正を目指す安倍首相がこの20年間、「慰安婦」問題を隠蔽・封殺するために教育と報道を支配し、「慰安婦」に関するマインドコントロールを続けてきた結果であるといえましょう。

昨年、開館から10年を迎えたwamでは、このような証拠隠滅を図る勢力に抗して、本格的な「慰安婦」資料のアーカイブ化に取り組むことにしました。この5月もソウルで開かれた第14回アジア連帯会議で、各国の被害者や支援団体と交流や連帯を深め、協力を呼びかけました。



erico

最近、相次いで開館したり、間もなく開館予定の韓国、台湾、中国などの「慰安婦」資料館へは資料提供と情報交換を行っています。「慰安婦」問題に関する国際機関への働きかけも続けており、国連の女性差別撤廃委員会（CEDAW）ではこの3月、日本政府に対して「被害者中心のアプローチを十分に採用していない」と指摘しました。

「慰安婦」問題をめぐる国内外のギャップは広がるばかりですが、高齢となった「慰安婦」被害者や元日本兵の寿命はいよいよ尽きかけています。厳しい状況が続く中、wamに課された役割は重く大きなものですが、日本に生まれた私たちは「慰安婦」問題の解決なしにアジアの人々と信頼関係を結ぶことはできません。この責務を果たすべく、これからも努力を重ねていきます。さて、毎年衣替えをしてきたwamの特別展、今はインドネシア展を開催中で、7月からはビルマ展に移ります。あまり知られていないビルマの慰安所と「慰安婦」、性暴力被害の展示なので、パネルの制作段階で意外な発見が多々ありました。是非一度wamに来館されて、このビルマ展をご覧ください。

**NPO 法人ホロコースト教育
資料センター(愛称 Kokoro)**
代表 石岡史子

Kokoro は、「ハンナのかばん」「杉原千畝」「アンネ・フランク」などホロコースト史を教材とした教育活動を行っています。

【新刊】『「ホロコーストの記憶」を歩く～過去をみつめ未来へ向かう旅ガイド』石岡史子、岡裕人著(子どもの未来社刊)
ヨーロッパの街を歩くと、市民が憩う公園

や道端、観光名所のとなりで、現代アートと見間違ふような、ホロコーストの記念碑に出会います。こんなふうに負の歴史を記憶することができるんだという発見と希望があります。様々な“記憶のカタチ”をたずねて、ベルリン～アムステルダム～アウシュヴィッツ～日本をめぐる旅ガイドを出版しました。

【大学生スタディツアー】年二回、アウシュヴィッツなどを訪れるスタディツアーへの大学生参加希望者を募集しています。主な訪問先はポーランド、チェコ、ドイツまたはオーストリア、アムステルダム。Kokoro が引率する回もあります。

詳細は HP をご覧ください →
<http://www.npokokoro.com/>

**開館9周年・YPMの近況
山梨平和ミュージアム理事長
浅川 保**

2007年5月に山梨平和ミュージアム(YPM)が開館してから9周年を迎えた。6月19日には、ノンフィクション作家・澤地久枝さんを迎えて「歴史に学び、現在を生きる」と題する記念講演、そして、総会を行う予定である。

戦後70年の昨秋から開催してきた企画展「戦場体験に見るあの戦争の実相」に代わり、6月4日からは、企画展「日本国憲法と立憲主義を考える」を予定している。安倍政権は、昨年9月、ほとんどの憲法学者が違憲と言っている「安保関連法」を強行成立させた。日本は、今「立憲主義の危機」ともいうべき状況に直面している。こうした現代の状況、課題をどう取り上げ

るか、歴史的、国際的視野から深めようとこの企画展を準備した。その構成・内容は以下の通りである。1 安保関連法と立憲主義の危機 2 立憲主義とは 3 近代日本の立憲主義の歩み 4 日本国憲法の制定過程 5 日本国憲法をめぐる70年 6 憲法9条の意義・国際的評価 7 自民党憲法改正草案を斬る。以上の1～7がパネル展示で、8が各紙の2015年9月19日前後の新聞記事の紹介、比較である。11月15日まで展示予定である。ご見学、ご批判頂ければ幸いです。

中帰連平和記念館
事務局長・理事 芹沢昇雄

記念館では年3回の理事会の午後に『中帰連に学ぶ会』と称し、記念館で毎回、一般公開で「勉強・学習会」を開き、総会の午後にも著名人に講演をお願いしている状況が定着しています。その直近の講演には5月22日に安川寿之輔先生に「福沢諭吉の見直し」のテーマで講演戴きました。

取材には特に昨年は敗戦70年と言う事で中国のCCTVを始め、吉林TVや香港フェニックスTVなども来館しました。国内でもNHKや全国紙の記者が来館しています。また内外の院生も来館し、記念館にも通い修士論文に「中帰連」を取り上げた中国人留学生から修論の寄贈をして戴きました。

2015年9月21、22日の2日間、中国友誼促進会が主催し記念館も後援した『戦争の痛みを忘れず、心の中に永遠の平和—中日関係シンポジウム』開かれ、記念館関係者から松村高夫理事長、石田隆至理事、小

島俊郎理事、張宏波先生、荻野富士夫先生が参加発表しました。当日は元中帰連の小島隆男さんと上坪鉄一さんのご遺族や、岡崎嘉平太さんのご遺族も参加され、日本人の参加は21名、中国側参加者28名でした。

今秋には記念館は10周年を迎え11月13日(日)川越の「ウェスタ川越」で10周年イベントを開催します。これからも歴史の負の事実を忘れず伝えていきます。

中帰連平和記念館記念館HP：

<http://npo-chuukiren.jimdo.com/>

芹沢HP：<http://serinobu.jimdo.com/>



第五福竜丸展示館
主任学芸員 安田和也

この6月、都立第五福竜丸展示館は開館から40年を迎えました。来館者は通算530万人となりました。被ばく50年に際して行った常設展示の一部、「核爆発実験年表」「第五福竜丸都展示館のあゆみ・年表」をリニューアルしました。

ビキニ水爆実験から62年とは、直接事件を知らない世代が大多数になる年月であり、来館する小中学校をはじめ高校・大学生の団体のほとんどすべてに説明をすることは、被ばく、核の問題をより身近に感じ今の世界の問題として関心を抱くことに大きな力

となっていると感じます。さらに市民グループへのガイドをふくめて、年間 600 回を超える「お話」をしています。

一方、施設の老朽化や船体、外に展示する福竜丸エンジンの劣化など、大きな課題も山積しています。展示館を東京都より委託管理する公益財団法人第五福竜丸平和協会は、都への要請や話し合いを重ねていますが、なかなか進展しないことも多々あります。

第五福竜丸は、来年、建造 70 年＝古希を迎えます。敗戦後の食糧難の時代に造られ活躍した木造漁船で、ただ一隻保存される船として、核の時代を背負う平和遺産としての福竜丸とともに、産業文化遺産としての福竜丸をアピールしていきたいと構想しています。

協会では、記念誌「都立第五福竜丸展示館 40 年のあゆみ」を刊行しました。これには「核爆発実験年表ポスター」が付いています。

川崎市平和館
シリーズ 平和学的に社会を見る
～第 1 回 誰もが暮らしたい社会の
仕組みを考える～

あなたにとって「暮らしたい社会」とはどんな社会ですか？戦争のない社会？貧困や格差、差別のない社会？のびのびと子育てができる社会？

平成 28 年度の企画として、平和学的な考え方を提供するシリーズ「平和学的に社会を見る」を 4 回にわたって開催します。1 回目の企画では、平和学の概念や、誰もが排

除されることのない、持続的平和に向けた社会を実現するための民主的な社会の仕組みについて考えると共に、中学生～大学生の考える、自分の暮らしたい社会像も紹介します。

【期間】

- 平成 28 年 6 月 16 日（木）から平成 28 年 7 月 18 日（月）まで
- 午前 9 時から午後 5 時

【会場】

- 平和館 1 階 屋内広場 （入場無料）

【内容】

1. パネル展示
2. 関連イベント

日時 平成 28 年 7 月 2 日（土）午後 2 時から午後 4 時

内容 ぴ～すレッスン（ミニ授業）

「平和な社会のための民主主義を
もう一度考える」

講師 松井ケティ（清泉女子大学 教授）

【入場等】 入場無料

【協賛】

- 日本平和学会

【展示参画主体】

- 川崎市立富士見中学校
- 神奈川県立神奈川総合高校
- 横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校 生徒有志
- フェリス学院大学 横山正樹ゼミ
- 恵泉女学園大学 高橋清貴ゼミ

川崎市平和館 HP より：

<http://www.city.kawasaki.jp/250/page/0000077607.html>

満蒙開拓平和記念館開館

3年を終えて

副館長 寺沢秀文

満蒙開拓に特化した全国唯一の記念館、それも民間運営の施設として平成25年4月に開業してから、早いものでもう丸3年。信州の山奥の不便な立地、132坪という小さな、それも満蒙開拓という極めて特殊なテーマに絞った記念館、「やっていけないはずがない」という声も少なくない中で、1年目には年間3万人を超え、3年目の今年も流石にやや減少したとは言え1割減程度で何とか食い止めています。この間には戦後70年等もあり、マスコミ等で取り上げられる機会も多く、「不都合な史実」として余り触れられる機会の少なかった「満蒙開拓」という史実を知ってもらえる機会が増えたものと思います。「開拓」とは言いながら、実質的には侵略の加担でもあったという「満蒙開拓の被害と加害」の両面にきちんと向き合う記念館として一応の評価も頂いています。入館料だけが頼りの民間運営にて財政的には今後も厳しいものがありますが、民間運営ならではのメリット、展示内容、表現等に対する規制等も無く、また市民目線での、なるべく平易な表現で「満蒙開拓」という史実を伝えていくというスタンスは今後も大切にしたいと思っています。記念館で定期実施の「語り部の会」で語って頂く元開拓団員等の語り部の方も年々高齢化等で少なくなっていますが、しかし、ボランティア組織が充実し、戦後世代の若い皆さんの活動参加者が増えつつあり、これまで聞いてきた生の体験談を今度は私たちが語り継ぐ時代が来ていることを

痛感しています。昨秋にも中国側の証言の聞き取り等に旧満州に調査に入り、今後も資料収集と分析等に注力していきたいものと思っています。

国際平和ミュージアム 立命館大学

KYOTOGRAPHIE 共同企画の「WILL：意志、遺言、そして未来—報道写真家・福島菊次郎」展が、2016年4月23日(土)～5月29日(日)に開催されました。戦後、10年以上にわたり原爆症に苦しむ家族を記録した作品により報道写真の世界へ入った福島菊次郎は、全共闘運動、三里塚闘争、自衛隊と兵器産業、環境問題など多岐にわたるテーマで激動する時代を写真に収めてきました。権力に迎合しないことを信念に撮り続けた写真は、戦後の日本が歩んできた道、残してきた課題を私たちに伝えていきます。本展はこれまで700を超える会場にて展示された福島自作のパネルによる写真展です。

世界報道写真展 2016—WORLD PRESS PHOTO 16—が、2016年6月3日(金)～6月25日(土)に開催されています。公開記念講演会として『How to Convey War Memory to Future Generations: Roles of Photographs(戦争の記憶の継承と写真の役割)』と題して6月10日にDr. Erik Somers氏 (the NIOD, Netherlands Institute for War, Holocaust and Genocide Studies オランダ戦争・ホロコースト・虐殺研究所 研究員)が講演をされました。

エリック・ソーマルズ博士は、アムステルダムにあるオランダ戦争・ホロコースト・

大虐殺研究所における歴史研究者です。第二次世界大戦の歴史や記憶に関する著書があり、第二次世界大戦の歴史について様々な博物館において展示の企画を担当しています。戦争体験者が亡くなる中で、博物館においてどのような内容と方法で展示をしていくのかを考える必要があり、過去の視覚化を可能にする写真の役割に焦点を当てて講演されました。

その他の展示や活動はホームページをご覧ください。

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/event/index.html>

平和資料館・草の家：高知 事務局員 安部愛

昨年12月8日から16日にかけて高知県立美術館で「写真で学ぶ『高知と戦争』展」を開催しました。これは、草の家副館長の岡村啓佐さんが20年にわたり取材を続けてきた「731部隊と高知」「沖縄戦と高知」「高知の被爆者」に、「フクシマの今」を加えた写真展です。中国ハルビン市にある侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館や、特定非営利法人沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」からも貴重な当時の資料やパネルをお借りして充実した展示内容となりました。1,590名以上の来場者がありました。この写真展は、昨年7月、草の家のメンバーと高知大学生らが中心となって実行委員会を立ち上げ、「15年戦争の加害と被害 戦争に反対した高知の人々」(9/2 話・岡村正弘)、「旧満州に生まれ生きる」(9/30 話・太田紘志)、「731部隊と高知」(10/19 話・岡村啓佐)、「加害の歴史と高知の戦争

遺跡」(11/10 話・出原恵三)など毎回異なるテーマのミニ学習会も併せた実行委員会を重ねながら準備をしました。

また、写真展の「731部隊と高知」で資料をお借りしたきっかけで、今年3月26日から4泊5日の日程で731部隊罪証陳列館より金成民館長ら4名が、731部隊ハイラル支部(543部隊)の元部隊員の聞き取り調査と、平和のための歴史ゼミナール(写真展実行委員会改め)・平和資料館・草の家が企画した講演会「731部隊と日中戦争」のため来高しました。3月29日の会当日は180名以上の参加者があり、金成民館長の「731部隊の罪証と歴史問題」と題した講演と、金成民館長と岡村正弘(草の家)館長による平和と友好を願う対談に耳を傾けました。講演会翌日の滞在最終日には、両館が歴史の調査・研究を信頼と友情によってさらに進めていくことを「協力協定書」(中国語では「合作協議書」)で確認し、両館長がサインをしました。6月11日から16日の日程で今度は草の家のメンバーが中国ハルビン市の侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館を訪問し、正式に協定書を交わすこととなっています。

現在、草の家ではまもなく始まる「2016ピースウエイブ in こうち」にむけて、準備をしています。毎年6月から8月にかけて、県内の個人・団体が企画した平和のための文化行事を行っています。今年も盛りだくさんの内容で10余の行事を行います。6月25日の「第34回平和七夕まつり」からスタートします。去年は地元の高知新聞でとりあげられ、特に市民(個人)からたくさんの方の折り鶴が寄せられ、嬉しい悲鳴で鶴の糸通しに追われました。また、7月13日か

ら 18 日までは「第 38 回戦争と平和を考える資料展」を開きます。今回は高知市朝倉から出兵した旧陸軍歩兵第 44 連隊をテーマに足もとから平和について考える企画展示を行います。その他の行事について、詳細等は草の家のブログ等ご覧ください。

<http://blog.livedoor.jp/kusanoie/>

岡まさはる記念長崎平和資料館
理事長・高實康稔

当館は昨年 10 月をもって設立 20 周年を迎えました。その節目のイベントとして、立命館大学の徐勝先生に「東アジアとは何か？—日本のアジア侵略とヘゲモニー」と題して記念講演をしていただき、当館の存立の意義と使命を再確認しました。

昨年 7 月、端島（軍艦島）が世界文化遺産に登録されたこともあり、最近はとりわけ韓国からの来館者やメディアの取材が多く、歴史認識の問題が決して過去の問題ではないことを痛感させられます。また、日本カトリック部落差別人権委員会が「端島（軍艦島）を通して考える近代日本」と題して理事長に講演を要請（3 月）したように、歴史認識の問題は日本でも関心が高まっているといえるでしょう。

釜山大学の韓国民族文化研究所の朴修鏡（パク・スギョン）教授を 2 月から 3 月にかけて訪問学者としてお迎えし、論文「原爆都市『祈りの』長崎の思想的転換—永井隆から岡正治へ—」を紹介・解説する講演をしていただいたのは特筆すべきことです。

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟長崎県支部の協力を得て、講演会「治安維持法と現代」を開催（4 月）しましたが、これ

は外国人の被害だけではなく日本人の被害についても展示したほうがよいという徐勝先生の提言を実践するための活動でもあります。

<http://www.d3.dion.ne.jp/~okakinen>

ナガサキピーススフィア 貝の火
ピースミュージアム

宮川雅一 ながさき“百人一首”展が 2016 年 5 月 24 日から 6 月 19 日まで開催されます。また「多彩画展～絵の好きな仲間たちの作品展」が 2016 年 6 月 21 日から 7 月 18 日まで開催されます。その他さまざまな情報がホームページに載っていますので、ご覧下さい。

ナガサキピースミュージアム

〒850-0921

長崎県長崎市松が枝町 7-15

TEL 095-818-4247

ひめゆり平和祈念資料館
学芸課 前泊克美

2015 年 12 月 22 日、戦後 70 年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」をスタートしました。「ひめゆり学徒隊」というと、どうしても生徒たちの存在が注目されがちですが、18 人の引率教師が生徒たちと行動を共にしています。教師たちの年齢は 20～50 代で、大学を卒業して初めての赴任校だった教師もいれば、県外に疎開させた家族の身を案じ自分亡き後の生き方を示唆する手紙を書いた教師もいます。

戦場に引率したという意味では責任が問われる立場なのかもしれませんが、教師た

ちは、時代の潮流に流され戦場に赴きながらも、戦場で遭遇した様々な岐路で、生徒のことを考えながら行動し、引率教師 13 人が命を落としました。

まさに時代の潮流が戦争に向かっているとも思えるような今、当時の先生方の体験を改めて見つめ直す必要があるのではと思います。ぜひ多くの方にご覧頂きたい展示会です。図録『ひめゆり学徒隊の引率教師たち』も発行いたしました。

2016 年 3 月 14 日・28 日には平和ガイド・バスガイド対象の「ガイド講習会」を、27 日には「教員向けガイドツアー」を開催しました。いろいろな立場の方々がひめゆり学徒隊のことを伝えて下さることが、戦争を知らない世代が「戦争って何だろう」「戦争が起こるとどういうことになるのだろう」などと考えるきっかけになるといいなと考えています。

2015 年 4 月に開始した職員による「次世代の平和講話」も 1 年が過ぎました。生存者の証言映像に加えて、ひめゆり学徒隊や沖縄戦の概要、生存者の戦後の思いなどを話しています。「ここでしか聞けない話が聞けた」「体験者とは違う視点での説明がされていたので、これまでとはまた違うかたちでも知ることができた」などの感想が寄せられています。

また、今年度も一般来館者を対象とした平和講話や「教員向け講習会」(学校現場におけるワークショップの紹介)などの実施を計画しています。

Tel:098-997-2100 Fax:098-997-2102

<http://www.himeyuri.or.jp>

不屈館—瀬長亀次郎と民衆資料—の 取り組み 館長 内村千尋

2013 年 3 月 1 日に開館した不屈館は 3 周年を迎えました。開館以来、様々な企画展や、講演会などを取り組んできました。3 周年の企画展は、カメラマンの石川文洋氏の写真展、3 日連続の講演会を取り組みました。

6 月 23 日、沖縄は「慰霊の日」を迎えます。沖縄戦の後遺症に苦しむ県民の姿を写真で記録してきた、報道カメラマン大城弘明氏の写真展やギャラリートークを計画しています。

5 月 20 日、沖縄ではまた悲しい出来事が起きてしまいました。元海兵隊員による女性殺害事件です。米軍統治下から、どれだけの子供や女性が犠牲になった事でしょう。今、沖縄の怒りは、臨界点に達しています。6 月 19 日には 10 万規模の県民大会を予定しています。

不屈館には、全国から来館者が来るようになっています。沖縄の戦後史、特に米軍統治下の弾圧の中で闘ってきた県民の姿を伝え、資料を展示し、館長が講話をしています。

沖縄の基地問題は、安倍政権になってから、ますます強硬に弾圧がつづいています。不屈館は過去の展示だけでなく今につながる資料の販売、情報も提供しております。戦後史が学べる数少ない資料館として今後も頑張っていきます。

多くの皆さまのご来館を心よりお待ちしております。

那覇市若狭 2-2 1-5

☎ 098-943-8374
ファックス 098-943-8375

佐喜眞美術館：沖縄

ジョルジュ・ルオー版画展が 2016 年 5 月 11 日（水）から 7 月 18 日まで展示されています。フランス絵画の巨匠として名高いジョルジュ・ルオー（1871-1958）は、太く黒い線と鮮やかな色彩を駆使しながら独自の精神世界を開いた、20 世紀を代表する画家です。

※常設展示：丸木位里・丸木俊「沖縄戦の図」もご覧いただけます。

〒901-2204 沖縄県宜野湾市上原 358

TEL 098-893-5737 FAX 098-893-6948

ウェブ <http://sakima.jp>

メール info@sakima.jp

米飛行士捕虜の来日と 墜落地市民との交流 伊吹由歌子：捕虜日米の対話

2015 年 12 月 6 日から 12 月 14 日、外務省による「米元捕虜草の根平和交流招聘プログラム」の第 7 組、5 名の米元飛行士捕虜たちが来日した。恒例の外務大臣、駐日米大使など日米政府要人の表敬訪問のほか、東京空襲戦災資料センター、横網町平和公園、また各自の撃墜地である群馬県秋妻・埼玉県三郷市・千葉県印西市、福岡、霞が浦と、3 組に分かれ、一泊旅行で当時の地元民と交流した。

無差別爆撃の飛行士たちは『「特殊捕虜」であり捕虜としての待遇を受ける資格はない』と言い渡され、大手町の堀端にあった

東京憲兵隊司令部では木造の「馬小屋」と称された建物に多数で押し込められた。米側空爆情報を得ようとする拷問と訊問、餓え、闇、不衛生な汚れ、看守による行き当たりばったりの残酷な仕打ちと脱水症状は、人間性をも脅かし、士気のうえでも試練だった。重度のやけどを負った飛行士たちも治療は施されず、長時間苦しみつつゆっくりと死んでいく彼らを見届けた。

印西市の畑に墜ちた B29 の前部射撃手・スコット・ダウニングさんは息子スチュースさんと来日。「日本人が一人亡くなった」と言う。墜落機の爆風で父を失った斎藤与五郎さん（92 歳）は穏やかな微笑でスコットさんと握手、「You are my friend.」とスコットさん。「私には赦すことは何もない。多くの懸念があったが、もう僕は大丈夫だ。」父はとうの昔にすべて赦しているというスチュースさん。

12 月 9 日、東京空襲戦災資料記録センター訪問では、この爆撃に参加したフィスク・ハンリーさんと、センターの証言者のおひとり、二瓶治代さんと一緒に 3 階の展示室に。二瓶さんは折重なって死んだ人々の一番下になっていて炎を生きのびた方、と紹介する。治代さんは 8 歳、ハンリーさんは 25 歳だった。ハンリーさんは **It was BAD! Bad, bad!** と仰り、時には **I was bad.** とも。入口に焼夷弾の展示と説明があり、自ら詳しく説明してくださる。日常的に行われていた民間人消防団の訓練写真やユニフォームを最初、本土決戦に備えての軍人の訓練ととられた。しかし展示されたユニフォームにより、軍服ではないと確認。そのあたりから、見る姿勢がぐっと現実実を帯びる。3 月 10 日撮影の写真をしながら、

「ひどい (Awful) ! 僕はずっと上にいて見たのだがどこも炎だった。」最後に二人は並んで腰を下ろした。

二瓶さん：私は日本人ですけど憲兵はとても恐ろしいと思っていました。「空襲が怖い」というと、両親から「そんなことを言うんじゃない。聞かれたら憲兵につかまってしまうよ」とよく言われました。ハンリーさんがその拷問に耐え、こうしてお会いできて本当に嬉しいです。

ハンリー：僕たちは生き延びましたね。貴女は仏教徒ですか？

二瓶：私は違います。

ハンリー：僕はクリスチャンだ。貴女は仏教徒かしらないが、唯一の神という存在が僕たち二人の命を助けてくれた。何故だと思いますか。

二瓶：何故でしょう？そういう意味では私たちふたり、おなじですね。

お二人ともに各自の場で、戦時体験と戦争の破壊・悲劇を若い世代に知らせる活動を続けておられる。



ハンリーさんと二瓶さん



2015 年戦後 70 周年記念展示

特別展 2

山辺昌彦

登別市郷土資料館・文化伝承館：北海道

戦後 70 年の特別展「戦争と登別」が 2015 年 7 月 17 日～9 月 23 日の会期で開催されました。戦時中の市内の様子をはじめ、終戦 3 日前まで記録していた幌別村時代の動員日誌、地元から出征した 3 人の遺品、戦時下の学校経営方針などに関する資料、婦人会活動、市内 2 か所に設置された防空監視哨、戦争被害などの、寄贈された所蔵資料 72 点を展示していました。当時の様子を見ながら平和の大切さを感じてほしいという趣旨で開かれたものでした。同資料館としては初めての戦争特別展で、「アジア・太平洋戦争」「地域から戦場へ」「地域の中の戦争」の 3 部構成により、市民が所有していた当時の新聞掲載写真や市内の地区別戦没者数なども展示されました。

Tel& Fax : 0143-88-1339

<http://www.city.noboribetsu.lg.jp/docs/2014120800042/>

室蘭市民俗資料館（とんてん館）：北海道

特別展「戦後 70 年・戦争と平和展」が 2015 年 8 月 1 日～10 月 4 日の会期で開催されました。空襲を受けて室蘭港で沈没した船の船鐘、16 インチ砲弾の破片、罹災証明書、教育勅語、奉安庫など、戦禍の記憶を伝える、室蘭の空襲や艦砲射撃、戦時中の市民

生活の資料約 150 点を展示していました。
Tel : 0143-59-4922 Fax : 0143-59-3715
http://www.city.muroran.lg.jp/main/org1400/documents/2015_08p2-3.pdf

青森県近代文学館：青森市

特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」が 2015 年 7 月 18 日～9 月 23 日の会期で開催されました。戦前から活躍した青森県出身の作家らを紹介するもので、戦後 70 年の節目に文学館が初めて企画したものでした。太宰治や菊谷栄ら県内出身の文学者 5 人の原稿や草稿を始め、昭和初期の雑誌「座標」「東北文学」など約 160 点とパネル 13 種類が当時の写真と共に展示されました。2015 年 10 月 24 日から、特別展の続編「戦後－青森文学と青森の復興」も開催されました。
Tel : 017-739-2575
<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/>

三戸町歴史民俗資料館

戦後 70 年企画展「モノが伝える戦争の記憶」が 2015 年 7 月 18 日～8 月 30 日の会期で開催されました。戦時中に使われた生活用具など、当時の時代背景が感じられるものを多数展示していました。
Tel : 0179-22-2739 Fax : 0179-20-1102
<http://town.sannohe.aomori.jp/wordpress>

八戸クリニック街かどミュージアム：青森

戦後 70 年特別企画「八戸戦後の写真展」が

2015 年 7 月 11 日～9 月 6 日の会期で開催されました。

第一展示「移ろいゆく街並み」では、中心市街地の街なかにそれぞれその場所の昔の写真を 50 か所以上、250 点を展示し、第二展示「暮らしと人で」は、ミュージアムの 2 階で昔の暮らしなどが写された連続写真を展示し、第三展示「地域の思い出」では、地区の昔の写真を展示していました。

Tel : 0178-32-7737

<http://www.ne.jp/asahi/machikado/enjoy/>

盛岡てがみ館：岩手

第 47 回企画展「戦後 70 年記念 家族のてがみ-手紙に刻まれた戦争の記憶」が 2015 年 6 月 23 日～10 月 19 日の会期で開催されました。次第に戦争体験者も少なくなり、戦争への意識が薄れつつありますが、戦時中に交わされた手紙は、時を越えて現代に生きる私たちに平和の尊さを教えてくれます。戦時中、出征などで離れ離れになった家族をつなぐ唯一の手段となったのが手紙でした。戦地と本国との間で交わされた手紙（軍事郵便）には検閲があったため、全てが自由に書けるものではありませんでしたが、その文面には家族への深い愛情が映し出されています。戦時下において交わされた家族の手紙を通して当時の状況や人びとの想いを紹介していました。

Tel : 019-604-3302

<http://www.mfca.jp/tegami/jigyo>

野田村立図書館：岩手

ミニ歴史展「戦後 70 年特別展」がギャラリー

一で2015年8月7日～31日の会期により開催されました。戦争を振り返り、戦争について考えるために企画されたものでした。アメリカ軍機2機により機銃掃射された旧野田小学校、その時の本物の弾丸や、当時の新聞や資料などを展示していました。

Tel& Fax : 0194-78-2938

<http://nodamurafan.jp/event/41246/>

仙台市戦災復興記念館：宮城

戦災復興展が2015年7月3日～12日の会期により開催されました。

Tel : 022-263-6931 Fax : 022-262-5465

<http://www.hm-sendai.jp/sisetu/sensai/>

秋田市油谷これくしょん：秋田

特別展「戦後70年 昭和のくらし展」が1階の研修室で2015年7月25日～8月30日の会期により開催されました。戦時中の新聞・ポスター、慰問袋・防空頭巾・日章旗、看板など、激動の昭和の時代のさまざまな物や、戦中戦後の人びとに使用された生活用品などを展示していました。

Tel : 018-893-4981 Fax : 018-893-4982

<http://aburaya-collection.or.jp/>

土浦市立博物館：茨城

テーマ展「戦争の記憶—土浦ゆかりの人・もの・語り」が2015年10月24日～12月6日の会期により展示室2・展示ホールで開催されました。図録を刊行しています。今回の展覧会では、博物館が収蔵する戦争に関わる約60点の資料とともに、戦中・戦後

に土浦に関わりを持った方の記憶を併せて紹介していました。現在では、実際に戦争を体験した人も数少なくなり、当時の記憶に触れる機会も少なくなりつつあります。それぞれの立場で戦争について考え、次の世代を担う子どもたちに戦争の記憶を伝え、ともに平和について考える機会としていました。

関連して、戦争の記憶を残す地を歩く見学会「歩いてたどる戦争の記憶」が11月3日に開かれました。

Tel : 029-824-2928 Fax : 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/page007772.html>

栃木県立美術館：宇都宮市

企画展「戦後70年：もうひとつの1940年代美術」が2015年10月31日～12月23日の会期で開催されました。図録を刊行しています。1945年の終戦以来70周年にあたる2015年に、戦時下から敗戦、戦後復興と再生という激動の道を歩んだ日本社会の中で、美術家たちがどのような作品を作り続けたかを、栃木県出身画家や女性画家を軸にして振り返る企画展でした。1930年代からいち早く戦地に赴き、その後従軍画家となった清水登之をはじめ、多くの画家が戦時下に国策に従って戦争画を描きました。一方、ふだん紹介されることの少ない女性画家たちも、戦時下には銃後の女性の労働を描いています。それが一転、敗戦により、占領下で日本が戦後復興と民主化の道をたどる中で、1940年代の後半はまったく違うイデオロギーに従って、画家たちも画題や作風を転換していくことになります。こう

した絵画だけではなく、益子の浜田庄司や竹工芸の飯塚琅玕齋など、工芸家たちや北関東の木版画家たちの戦前・戦後の活動もあわせて振り返っていました。彼らは何を考え、何を表現したのでしょうか。洋画、日本画、工芸、版画など約 170 点に加えて、戦争柄の着物や、グラフ雑誌・漫画、絵本などの印刷物も、当時の社会や世相を知るための貴重な資料としてともに展示していました。

Tel : 028-621-3566

<http://www.art.pref.tochigi.lg.jp/>

大井郷土資料館：埼玉

戦後 70 年記念企画展「戦時中の暮らし」が 2015 年 10 月 3 日～12 月 6 日の会期で開催されました。市内に残っていた陸軍造兵廠の遺構もほとんど失われ、造兵廠で働いたことのある方も学徒動員の世代となり、現在では 80 歳を超えています。戦後 70 年を経過し、戦争を知らない人が圧倒的に多くなっているという現実をふまえ、戦時を生きた人たちの記憶や当時の資料を、今の人たちに伝え、さらに未来へつなげていく趣旨のもと、これまでに資料館へ提供された資料の中から、戦時中の教育(国民学校)、第一陸軍造兵廠、戦時中の経済、兵士の出征、空襲への備え、女性たちという角度から戦時中の様子や暮らしについて物語る資料や写真を展示していました。

Tel : 049-263-3111、Fax : 049-263-3091

<http://www.city.fujimino.saitama.jp/doc/2014102500014/>

豊島区立郷土資料館：東京

秋の収蔵資料展「池袋ヤミ市と戦後の復興」が 2015 年 9 月 14 日～11 月 29 日の会期で開催されました。郷土資料館では、1984 年の開館以来、戦後池袋の復興を象徴する「池袋ヤミ市」を常設展のテーマに掲げ、池袋東口の「ヤミ市」模型を中心に展示を行ってきました。開館当初から「ヤミ市の博物館」として注目をあつめ、全国にその存在を知られるほどになりました。戦後、焼け野原となった池袋には 1,200 軒以上の長屋式連鎖商店街（通称ヤミ市）が誕生しました。ヤミ市は戦後の荒廃した社会の暗部の象徴とみなされる一方で、廃墟となった街に活気と活力をもたらし、人びとの生活再建を支える存在でもありました。立教大学・東京芸術劇場・豊島区の共催で戦後 70 年企画「戦後池袋ーヤミ市から自由文化都市へー」と題する展示会が各会場で開催されました。資料館は秋の収蔵資料展の一環として、このプロジェクトに参加しました。池袋ヤミ市と戦後の暮らしに関する資料のほか、1962 年に池袋からヤミ市が姿を消すまでの戦後池袋の変遷を写真でたどっていました。「焼け跡からの復興」「戦後の暮らしとヤミ市」「戦後の暮らしー統制・配給時代の生活資料」「写真でたどる戦後池袋」の 4 つのテーマで展示をしていました。

Tel : 03-3980-2351

<http://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/oshirase/2015aki.html>

文京ふるさと歴史館：東京

特別展「復興への想いー生きよ！もっと強く」が地下 1 階の展示室で 2015 年 10 月 31

日～12月13日の会期により開催されました。図録を刊行しています。“戦争を知らずに育った”世代は、いまや日本人の大多数を占め、戦争体験は次第に風化しつつあります。命の尊さを考える時、失われていく、悲惨な戦争の記憶と体験を埋没させてはなりません。歴史館は、戦災と震災を“復興”という観点でとらえ、特別展を開催しました。渋沢栄一、若槻礼次郎、後藤新平、寺田寅彦、田山花袋、永井荷風、坂口安吾という著名人中心の展示でした。湯島聖堂、砲兵工廠、震災を報じた雑誌、文京区の戦災資料、徴兵関係資料、小川惣平日記、戦時スローガンが書かれた箸袋、伝単、手塚治虫の作品、オリンピック関係資料なども展示していました。

Tel : 03-3818-7221

https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/event/images/icn_tenji_tokubetsu.gif

世田谷文学館：東京

「戦後70年と作家たちⅡ」が2015年10月10日～2016年4月3日の会期により1階展示室で開催されました。本土空襲、広島・長崎への原爆投下、終戦、そして連合国軍による占領下へと、死と隣り合わせの極限状況から、あらゆる価値観が激変していく混沌の日を、作家たちはどのように見、生き、再生への道のりへと向かったのかを、館蔵の終戦と戦後を描いた作家たちの資料により紹介していました。

Tel : 03-5374-9111 Fax : 03-5374-9120

<http://www.setabun.or.jp/exhibition/collectio>
[n.html](http://www.setabun.or.jp/exhibition/collectio)

小金井市文化財センター：東京

企画展「戦時下の生活」が2015年11月3日～12月20日の会期で開催されました。戦争は生活のあらゆる面に影響を及ぼしており、戦争と関連しない物事はひとつもないと言っても過言ではありません。今回の展示では、小金井出身の特攻隊員の遺品・写真や市内各地に残る戦時体制下の生活資料を公開していました。改めて戦争の悲惨さと平和の尊さについて考えるために開いたものでした。

Tel : 042-383-1198

<http://www.city.koganei.lg.jp/kakuka/shogai>
[gakushubu/syougaiagakusyuuka/siryounkazaikakari/bunkazaisenta.html](http://www.city.koganei.lg.jp/kakuka/shogai)

小平市小平ふるさと村：東京

文化財特別展「戦争と暮らし」が2015年10月15日～11月15日の会期で開催されました。戦争当時のことを直接知る人も次第に少なくなってきました。しかし、小平市内には戦時下に作られた石碑の類いなど、戦争に関連する文化財を数多く見ることができます。また、民具庫には戦時中に作られた代用品など、戦前・戦中・戦後の暮らしをうかがわせる生活用具や、国民を鼓舞する軍歌のレコードなども所蔵されています。今回の特別展では、これらの文化財を中心に、当時の印刷物や写真パネルなどを交えて展示していました。

Tel : 042-345-8155

<http://kodaira-furusatomura.jp/>

旧多摩聖蹟記念館：東京

特別展「戦時下の多摩聖蹟記念館と多摩市」が2015年10月24日～12月14日の会期で開催されました。多摩聖蹟記念館に遺された業務日誌や関連する資料などから、戦時下の記念館の活動や当時の多摩市の様子について紹介していました。

Tel：042-337-0900 Fax：042-337-0900
<http://www.city.tama.lg.jp/shisetsu/17997/019230.html>

日野市郷土資料館：東京

企画展「平和の尊さを語り継ぐまちー戦後70年平和展」が2015年10月10日～2016年1月11日の会期で開催されました。戦時中の暮らしや出征した兵士たち、戦争と子ども、満蒙開拓と日野など、市民から提供された資料を展示して平和の尊さを若い世代に語り継いでいました。

Tel：042-592-0981 Fax：042-594-1915
<http://www.city.hino.lg.jp/museum/>

ふるさと府中歴史館：東京

「戦後70年 府中と戦争の記録ー戦中・戦後の市民の暮らし」が2015年10月6日～12月6日の会期により2階公文書史料展示室で開催されました。アジア太平洋戦争には日本の全国民が関わり、多摩地域に住んでいた人びとも何らかの形で戦争に関わりました。とくに戦争が激化する昭和10年代から戦争末期にかけて、多摩地域では首都東京の郊外に位置することから多くの軍事関連施設や軍需工場が作られました。府

中周辺にも旧日本陸軍燃料廠、調布飛行場をはじめ多くの軍施設や兵器工場がありましたが、これらの施設は当時のアメリカ軍の攻撃対象にもなっています。当時の人びとの記憶はうすれていきますが、地域に遺された資料は戦争の歴史を今に伝えていきます。現在、府中市は遺構として白糸台掩体壕（市史跡）を現地で保存・公開しています。今回の展示では、戦時下、戦後すぐの府中市域の旧町村（府中町、西府村、多磨村）の混乱する社会情勢や人たちのくらしの様子について、主に館所蔵の公文書などの記録資料を用いて紹介していました。現在の貴い平和、あるいは将来に向けての平和を考える参考にするために展示していました。

「戦後70年 府中と戦争の記録ー戦中・戦後の市民の暮らし（第2部）」2015年12月8日～2016年2月28日の会期により2階公文書史料展示室で開催されました。同じ趣旨で一部展示資料を入れ替えて開いたものです。

Tel：042-335-4393 Fax：042-360-4401
https://www.city.fuchu.tokyo.jp/bunka/ibento/bunka/MemoryOfWarInFuchu2_2nd.html

三鷹市公会堂さんさん館

「三鷹市戦争関連資料」展が2階展示室で2015年8月11日～15日の会期により開催されました。

戦後70年特別企画として、市民の自宅などに保管されている戦争遺品や手紙、写真、軍隊資料、太平洋戦争や当時の三鷹をしのぶ資料などを三鷹市所蔵の資料とあわせて展示していました。

Tel : 0422-29-9868P Fax: 0422-43-6146

<http://mitaka.jp.n.org/kokaido/>

拓殖大学創立百年史編纂室：文京区・東京

「戦後 70 年特別展 青春の別歌（わかれ）—永銘 拓殖大学戦没・殉難者」が八王子国際キャンパスでは 2015 年 11 月 2 日～27 日の会期により、文京キャンパスでは 2015 年 12 月 1 日～22 日の会期により、それぞれ開催されました。学業半ばにして戦争で死んだ拓殖大学の学生ゆかりの写真パネルや映像を展示・上映していました。

Tel : 03-3947-7140

<https://www.u-presscenter.jp/modules/bulletin/index.php?page=article&storyid=8749>

中央大学：八王子市・東京

戦後 70 年記念「あらためて戦争と中央大学を考える」が多摩キャンパス グリーテラスで 2015 年 10 月 13 日～25 日の会期により開催されました。図録を刊行しています。中央大学はアジア太平洋戦争によって多大な影響を受けたと同時に、戦争の遂行のために学生を戦地に送ることを認め、巻き込んでいった責任があります。70 年という長い年月が流れ、かつて日本が戦争という過酷な現実のさなかにあったことを想像することは難しくなっています。現代の学生が、目指す道に向かって学問を修得しながら、友や師と語り合い、卒業後に活躍する未来に思いをはせる青春は、あの時代に生きた若者にとっては、いかに渴望しても手の届かないものでした。そのような時代のなか、在学生のひとは、学籍をのこしたまま徴

兵される学友との別れを惜しんで「惜別の歌」を作曲しました。この歌はその後、卒業式などの場で歌いつがれ現在に至っています。視点を世界に向ければ、この現代においても、安全に暮らし、自由に学ぶことのできない人たちが大勢いることも忘れてはならないことです。このような歴史を経た中央大学に生きる者として、学びの場のありがたさを再認識し、その力を未来に生かせることに感謝する心を持ち続けることは大切なことです。中央大学は戦後の学制改革のなかで、広く国民に勉学・学修の機会を提供し、民主主義を支える教育を積極的に展開してきました。1946 年の女子学生への門戸開放、1948 年の通信教育部の開設、1950 年の自治会などの主催による大学祭の開催など、民主的な教育制度を根付かせ、民主的な運営を行ってきました。戦後の中央大学は、1948 年の戦没者慰霊祭に始まり、1954 年の不戦週間、1955 年には在学中に兵となった学生で戦没した学生の調査や慰霊祭の実施、「学徒出陣」から 50 年にあたる 1993 年には「平和を愛し地域と地球に感謝する全中央大学の日」として平和祈念式典、そして 1998 年と 1999 年には旧植民地出身の元学生への特別卒業証書の贈呈を行いました。このように中央大学は過去を振り返り、未来に生かす活動を続けてきました。そして、2015 年は戦後 70 年にあたるとともに中央大学にとっては創立 130 年の年にあたります。創立記念日の 7 月 8 日には戦後 70 年記念講演会「戦中・戦後の中央大学」を行い、以降、「出陣学徒壮行会」の日にあたる 10 月 21 日にはシンポジウムを開催し、その他展示などの活動を通じて、戦争の時代と中央大学を見つめ直し、その

成果を後世に繋げています。創立以来、有為の人財を輩出してきた中央大学は、戦争の記憶を風化させることなく、これからも教育研究活動を通じて人類福祉の増進に貢献することを銘記します。

戦後 70 年記念シンポジウム「戦争と中央大学」が 1943 年の「出陣学徒壮行会」の日にあたる、2015 年 10 月 21 日に多摩キャンパス 8 館 8307 教室で開催されました。シンポジウムの総司会役は中島 康予法学部長、挨拶は酒井正三郎総長・学長と広岡守穂法学部教授、シンポジウムのコーディネーターは松尾正人文学部教授、パネリストは岡田大士法学部准教授・土田哲夫経済学部教授・松野良 一総合政策学部長でした。

Tel : 042-674-2050

<http://www.chuo-u.ac.jp>

法政大学：町田市・東京

戦後 70 年・平和記念碑建立 20 年に考える―法政大学の学徒出陣資料展”が法政大学経済学部同窓会と平和記念碑建立 20 周年記念事業実行委員会の主催で多摩キャンパス エッグドーム 2 階ロビーにおいて 2015 年 11 月 16 日～21 日の会期により開催されました。法政大学多摩キャンパスの経済学部棟の近くには、石のモニュメント「平和記念碑」が建っています。この碑は戦後 50 年の 1995 年に、法政大学経済学部同窓が呼びかけ建立したものです。それから今年で 20 年、そして戦後 70 年の節目にあたり、開催されたものです。「戦争と平和を共に考える集い」は 2015 年 11 月 21 日に多摩キャンパス開催されました。第 1 部は平和記念碑前での集い、第 2 部は法政大

学学徒出陣資料展を見る、第 3 部は戦争と平和を共に考える―記念講演会で、高柳俊男教授の「法政大学生の学徒出陣」、嶋崇同窓会員の「戦後世代からの問題提起」などの講演がありました。

法政大学では戦後 70 年に際して、「戦後 70 年 法政大学と出陣学徒―記憶と記録」と題し、公開シンポジウムを 2015 年 11 月 23 日に市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー26 階 スカイホールで開催しました。法政大学の学徒出陣に関するシンポジウムとしては、2013 年 12 月 16 日に挙行了した「学び舎から戦場へ―学徒出陣 70 年法政大学の取り組み」に続いて 2 度目です。第一部では、2012 年度から開始した法政大学の学徒出陣調査に関して、従来の記録を見直すこととなった学籍簿などによる出征者数の統計調査、学徒出陣経験者への聞き取り調査などについて中間報告が行われました。第二部では、「学徒出陣の記憶と記録―各大学の取り組み」と題して、現在、学籍簿調査や聞き取り調査、展示などの学徒出陣に関する取り組みを行っている首都圏の大学（基調講演・パネルディスカッション：慶応義塾福沢研究センター 都倉武之准教授、報告・パネルディスカッション：専修大学総務部大学史資料課 瀬戸口龍一氏・日本大学広報部大学史編纂課 高橋秀典氏、指定質問者：中央大学広報室大学史資料課 奥平晋氏）をまねき、開催されました。

Tel : 03-3264-6502 Fax : 03-3264-6504

<http://daigakushi.ws.hosei.ac.jp/index.html#hpb-container>

相撲博物館：墨田区・東京

戦後 70 年「大相撲と戦争」が 2015 年 10

月 20 日～12 月 18 日の会期で開催されました。戦争の影響は大相撲にも大きく及び、力士をはじめ多くの協会員が戦地に赴き、勤労奉仕をし、空襲で被害を受けました。戦後もしばらくの間、開催時期や興行場所が定まりませんでした。今日の大相撲は、戦争による苦難を乗り越えて存在していると改めて感じます。今回、戦後 70 年を機に、日中戦争・太平洋戦争下の大相撲の様子を展示するとともに、戊辰戦争、日清戦争、日露戦争などとの関わりもあわせて紹介していました。大相撲から戦争をとらえることで、戦争の惨禍と平和の尊さについて考えるために開かれたものでした。

Tel:03-3622-0366

http://www.sumo.or.jp/sumo_museum/display/list

専修大学大学史資料課：川崎市・神奈川

終戦 70 年記念企画展「専修大学と学徒出陣」が生田校舎 9 号館 1 階で 2015 年 11 月 6 日～12 月 5 日の会期により開催されました。大学生と戦争と言えば、1943 年 10 月の「学徒出陣」が思い浮びます。専修大学からも多くの学生が戦地へと向かいました。専修大学は法学部と経済学部から成る社会科学系の大学でしたので、学生のほとんどが出征対象者となりました。本展示では、出征した学生だけでなく、残って軍事教練や勤労動員に従事した学生、疎開や慰問に付き添った教職員、そして大学当局など、誰もがいやおうなく戦争に巻き込まれていった戦時下の専修大学と専大生の姿を写真や資料を通して、紹介していました。展示構成は、第 1 章 軍事教練の開始－変わりゆく

学園生活、第 2 章 報国隊の誕生－軍隊化していく大学、第 3 章 戦時下の教育政策－私立文系大学の受難、第 4 章 勤労動員の日々－学び舎を離れて、第 5 章 戦地への旅立ち－ペンを銃にかえて、第 6 章 新たな出発－今村力三郎を総長に でした。

Tel:03-3265-5879 Fax : 03-3265-5923

http://www.senshu-u.ac.jp/univguide/history/museum/_14413.html

明治大学平和教育登戸研究所資料館

第 6 回企画展「NOBORITO 1945 －登戸研究所 70 年前の真実」が＜第一期＞「NOBORITO 1945 －8 月 15 日までの登戸研究所」が 2015 年 8 月 5 日～2016 年 3 月 26 日の会期で、＜第二期＞「NOBORITO 1945 －8 月 15 日以降の登戸研究所」が 2015 年 11 月 18 日～2016 年 3 月 26 日の会期で開催されました。戦争が終結した年、陸軍登戸研究所では、さまざまなことが行われました。まず、「本土決戦」をひかえて、4 月まで大規模に風船爆弾の作戦が実施されました。作戦終了後の 4 月 29 日には登戸の本部で分散・疎開（移転）のための式典が行われ、5 月には登戸研究所の本部と第一科（風船爆弾・電波兵器）と第二科（毒物・爆薬・生物兵器）は長野県に移りました。一方で第三科（偽札製造）は生田に残りました。長野に拠点を移した登戸研究所は、〈本土決戦〉用の新兵器（く号・ね号など）の開発と、遊撃隊が使用する破壊工作用の兵器（時限爆弾・焼夷弾など）の量産を進めました。しかし、戦争は日本の敗北に終り、登戸研究所は解散となり、長野と生田の登戸研究所では、膨大な証拠物件と

兵器類の焼却・破壊が進められました。その後研究所の各施設はアメリカ軍が接収し、関係者はアメリカ軍の尋問を受けました。今回の企画展では、第一期で 1945 年 8 月 15 日までの登戸研究所の活動実態と兵器開発・生産に焦点をあて、第二期では、敗戦後の登戸研究所の証拠隠滅作業と元所員たちの戦後に焦点をあて、当時の貴重な現物展示をまじえて、70 年前の登戸研究所の真実を明らかにしていました。

Tel: 044-934-7993

<http://www.meiji.ac.jp/noborito/index.html>

三条市歴史民俗産業資料館：新潟

企画展「戦後 70 年 あの頃の暮らし」が 2015 年 8 月 11 日～9 月 13 日の会期で開催されました。三条は長岡のように空襲を受けることはありませんでしたが、人びとは軍需産業へ動員され、生活物資を制限されるなど、苦しい暮らしを余儀なくされました。身近な歴史を振り返り、平和について考えてみる展示会でした。

Tel : 0256-33-4446 Fax : 0256-33-7060
<http://www.city.sanjo.niigata.jp/shougaigaku-shu/rekimin/page00080.html>

長野県立長野図書館

戦後 70 年特別企画「発禁 1925-1944 ; 戦時体制下の図書館と知る自由」が 2015 年 8 月 1 日～9 月 13 日の会期で開催されました。県立長野図書館には 1925 年から 1944 年までの間の、発行禁止・閲覧禁止とされた本と図書館の記録があります。時の政府の検閲によって伏せ字となっている文章、図書

館から消えていった本、雑誌、新聞…。表現の自由そして知る自由が失われ、やがて戦争が始まります。戦後 70 年を迎えるにあたり、県立図書館ではこれらの記録をデジタル化し「信州デジくら」で公開するとともに、図書館で関係する資料や戦争を語り継ぐ記録を展示しました。検閲の記録『出版物差押通知接受簿』や対象となった所蔵資料、『出版物差押通知接受簿』、長野県出身の旧海軍甲種飛行予科練習生の同窓会「県甲飛会」の会報、「アサヒグラフ」、「週報」など戦時下で発行された資料を展示していました。

Tel : 026-228-4500 Fax : 026-228-4933

<http://www.library.pref.nagano.jp/>

あま市美和歴史民俗資料館：愛知

夏の企画展「戦後 70 年 戦争と暮らし展」が 2015 年 8 月 1 日～9 月 27 日の会期で開催されました。戦中の生活と暮らしを物語る写真パネルなどを展示していました。

Tel : 052-442-8522

<http://www.city.ama.aichi.jp/event/3353/005725.html>

東浦町郷土資料館 うのはな館：愛知

秋の企画展「戦争と平和展」が 2015 年 10 月 21 日～11 月 29 日の会期で開催されました。その後、ミニ企画展「続・戦争と平和展」も開催されました。戦争を知る人が少なくなる中、その戦争の悲惨さと、平和の大切さを若い世代に伝えることがより難しくなっています。大きな空襲のなかった東浦町でも約 1600 人の兵士が出征し、お

よそ 400 人の命が失われました。また、外地で終戦を迎えた人たちは略奪に合いながらやっとの思いで日本に帰ってきました。人びとは戦争をどう生き、終戦を迎えて何を思ったのか。この企画展では、それを知る手掛かりとなる資料を展示していました。

Tel : 0562-82-1188

<http://higashiura-guide.jimdo.com/>

三重県立図書館：津市

企画展「三重の文学 戦後 70 年」が 2 階の文学コーナーで 2015 年 10 月 10 日～11 月 15 日の会期により開催されました。2015 年は、没後 50 年となった江戸川乱歩や、若くして戦死した竹内浩三など、三重にゆかりの深い文学者が改めて注目を集めた年でもありました。三重県内の公共図書館などで構成する三重県図書館協会の主催によるもので、展示では、三重県立図書館の所蔵資料を中心に、主に戦後に活躍した三重の文学ゆかりの人物にまつわる図書や原稿などを展示するとともに、小説や詩、短歌、俳句などさまざまな分野の同人誌・個人誌も紹介していました。

関連の記念講演会として、文芸評論家の勝又浩法政大学文学部名誉教授の講演「日本語と日本文学の性格－短歌俳句から私小説まで」が 2015 年 10 月 31 日に三重県生涯学習センターの大研修室で開かれました。

Tel : 059-233-1181 Fax : 059-233-1191

<http://www.library.pref.mie.lg.jp/association/exhibition/index.htm>



滋賀県平和祈念館：東近江市

第 12 回企画展示「空襲と疎開」が 2015 年 10 月 3 日～12 月 20 日の会期で開催されました。15 年戦争の末期、連合国軍に対して日本軍は敗退を続け、やがて爆撃機が本土を空襲できるところまで後退します。本土決戦を辞さない日本軍部は、乏しくなった人材と資源を動員して準備を進めるとともに、空襲で主要建物が延焼しないよう周囲の民家を取り壊し、人口が多い大都会の学童を地方へ分散させる方針を固めました。本展では、大阪市から空襲を避けて滋賀県にやってきた約 12,000 人の疎开学童の様子を中心に紹介していました。

Tel : 0749-46-0300 Fax : 0749-46-0350

<http://www.pref.shiga.lg.jp/heiwa/heiwamus-eum/>

東近江大風会館：滋賀

戦後 70 年企画「戦時中のおもちゃ」が日本独楽博物館との共催で 2015 年 10 月 29 日～11 月 30 日の会期により開催されました。日本独楽博物館所蔵の戦時中のおもちゃ、すごろく、かるた、百人一首、福笑い、独楽、ベーゴマ、塗り絵、めんこ、ブリキ玩具など、63 種類 516 点が展示されました。

Tel:0748-23-0081 Fax:0748-23-1860

<http://oodako.net/>

城陽市歴史民俗資料館（五里ごり館）：京都

戦後 70 年記念企画展「城陽と戦争」が 2015 年 10 月 17 日～12 月 20 日の会期により特別展示室で開催されました。城陽でも、戦

争のために亡くなったり、大切な人を失ったり、苦しい生活を送った人たちがいました。戦後 70 年を経て、戦争を体験した人びとの高齢化もすすみ、その頃の話聞くことはだんだん難しくなっています。今後も戦争の記憶が風化しないように、企画展は戦時中の城陽で、人たちが何を思い、どう暮らしていたのか、当時の資料から振り返るものでした。展示構成は、Ⅰ 戦地に行った人々、Ⅱ戦時下の暮らし、Ⅲ戦争と城陽、Ⅳ市内の戦争遺跡 でした。

城陽市内在住の戦争体験者の話を聞く、ワークショップ「戦争のお話を聞こう」が 2015 年 11 月 8 日に特別展示室で開かれました。

Tel:0774-55-7611 Fax:0774-55-7612

<http://www.city.joyo.kyoto.jp/rekishi/tokuten/n%20new.html>

京都大学総合博物館：京都市

戦後 70 年特別展「人間らしく、戦争を生き抜く」が赤十字国際委員会（ICRC）と共催で 2015 年 11 月 25 日 ～ 2016 年 1 月 10 日の会期により開催されました。本展示は、赤十字国際委員会（ICRC）の蔵書・アーカイブ局が保管する膨大な記録から、写真や資料を選んで展示するものでした。収容所に囚われ、自由を奪われた人たちの状況を伝えると共に、戦争が蛮行に変わることは阻止されなければならず、人が人たる道を歩むことはすべての人に与えられた権利であることを、これから次世代を担う若い方に知ってもらうために開かれたものです。関連してギャラリーセッション1「戦時下における捕虜-歴史的な観点から」が 2015

年 12 月 10 日に開かれ、評論家で吹浦忠正 元埼玉県立大学教授が登壇し、第二次世界大戦以前の戦時下における捕虜の状況を、特に日本人捕虜に焦点を当てて解説しました。また、捕虜条約が誕生するに至った経緯や、その後、捕虜がどのような保護を受けることになったのか、も説明しました。ギャラリーセッション2「中東で何が起きているのか -紛争下における国際人道法の役割」が 2015 年 12 月 17 日に開かれ、浜本正太郎京都大学大学院法学研究科教授、ピーター・ネルソン在京スイス大使館公使、柴崎大輔 ICRC 駐日事務所政策担当官が登壇し、戦時下のルールとして誕生した国際人道法（IHL）の意義や、IHL 推進に尽力しているスイス政府の取組み、現在中東で起きている人道危機について、特にレバノンに焦点を置いた人道的観点から、それぞれの専門家が対談しました。

Tel : 075-753-3274 Fax : 075-753-3277

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp>

紫織庵：京都市

戦後 70 年特別企画展「ボンチ」のきものが映す War Propaganda と戦前の昭和史」が 2015 年 3 月 11 日から開催されました。本特別展では当館所蔵のボンチのきものを通じて、戦争プロパガンダと戦前の昭和史を見つめるものでした。

Tel : 075-241-0215 Fax : 075-241-0265

<http://shiorian.com/>

姫路市平和資料館：兵庫

秋季企画展「駅前開発からみた戦前・戦中・

戦後の姫路」が2階の多目的展示室で2015年10月3日～12月20日の会期により開催されました。姫路駅前の、戦前の中心街路の移り変わり、姫路大空襲の罹災状況、戦後直後の闇市及び人びとの暮らしや代表的な復興事業である「大手前通り」の着工から完成までの道のり、姫路の主な戦後復興事業や復興の基盤となった「ラモート合併」、さらに産業、文化の復興、戦後の学制などを紹介していました。展示資料点数は、実物資料101点、写真資料138点、図解資料7点でした。

関連して、玉置正光さんを講師に「姫路空襲体験談を聞く会」が2015年11月3日に2階の会議室で開かれました。

Tel:079-291-2525 Fax:079-291-2526

http://www.city.himeji.lg.jp/s50/heiwasiryo/_8293/_32761.html

加西市埋蔵文化財整理室：兵庫

戦後70年企画展示「わたしたちの暮らしと戦争」が2015年8月12日～2016年3月31日の会期により開催されました。第二次世界大戦終戦後70年の節目の年にあたり、当時の資料をもとに時代を振り返り、平和について改めて考える機会とするためのミニ企画展示でした。太平洋戦争中に作られたカルタ、七月の常会徹底事項説明資料（1944年）、機影カード、敵機性能識別便覧（1944年）、軍服・水筒・衣のう・飯ごうなどを展示していました。

Tel：0790-42-4401 Fax：0790-42-4401

<http://www.city.kasai.hyogo.jp/04sise/11osir/osir1508/osir150825b.htm>

鳴尾図書館：兵庫

企画展示「戦後70年 西宮・戦争の記憶－空襲の記憶を伝える」が2015年8月7日～9月2日の会期により開催されました。

先の大戦を記憶している人も年々減りつつある今、平和を守り戦争の惨禍を繰り返さないために、後世に戦争の記憶を伝え続けることが重要となっています。1945年8月5、6日は、西宮市街地はアメリカ軍による大規模な空襲をうけた日です。今回の企画では西宮市人権平和推進課平和資料館と広報課の協力を受け、貴重な写真を複製して展示したほか、空襲体験者のビデオを開催期間中に随時上映していました。

Tel:0798-45-5003

https://tosho.nishi.or.jp/cgi-bin/cttcgi/info_back_content.cgi

神戸大学附属図書館大学文書史料室： 神戸市・兵庫

2015年度神戸大学史・特別展「戦時下の神戸大学－戦後70年記念」が神戸大学百年記念館1階展示ホールで2015年10月26日～11月6日の会期により開催されました。戦時下の学生たちは、どのような青春を過ごしたのでしょうか。この展示では、神戸大学における戦争の歩みを歴史資料や写真などで振り返っていました。

Tel：078-803-5035

http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/event/2015_10_26_01.html

奈良県立図書情報館：奈良市

戦争体験文庫企画展示「進駐軍と奈良」2015年10月1日～2016年3月30日の会期で開催されました。第二次世界大戦直後、奈良の進駐軍日本人通訳が所持していたアルバムから、1940年代後半の、奈良に進駐したアメリカ軍の軍人や日本人スタッフ、奈良市を中心とした光景、アメリカ人の目から見た日本人の暮らしなどの写真約40点を紹介するものでした。

Tel：0742-34-2111 Fax：0742-34-2777

http://www.library.pref.nara.jp/collection_senta/exhibition

奈良大学図書館

企画展示「総力戦と戦時体制の時代経験ー『戦後70年』を迎えて」が2015年1月26日～3月21日の会期により開催されました。壁面ガラスケースで、戦地に赴く出征兵士に贈られた寄せ書き日の丸を2点と、岐阜県における「外交一新県民有志大会」開催のポスターを展示していました。平面ガラスケースでは、「Ⅰ．満洲事変期の関西地域のように」「Ⅱ．日中戦争の発生・拡大と戦時体制の形成へ」「Ⅲ．日中戦争の長期化と戦時体制下の奈良」「Ⅳ．日中戦争からアジア・太平洋戦争へ」の4つに分けて構成していました。このうち、「Ⅲ．日中戦争の長期化と戦時体制下の奈良」では、奈良県がまとめた『国民精神総動員実施概要（第二輯）』、奈良県観光連合会が発行していた雑誌『観光の大和』、奈良市の『昭和十六年度歳入歳出決算書』『昭和十七年度予算決議書』など、図書館で所蔵する史料8点を展示し

ていました。日中戦争の発生・拡大・長期化の中で戦時体制の形成が進んでいったことが展示から解りました。

Tel:0742-44-1251 Fax: 0742-41-0650

<http://library.nara-u.ac.jp/nara/21gou.pdf>

鳥取県立博物館

「戦後70年 鳥取と戦争」が2015年12月5日～2016年1月11日の会期により第1・2特別展示室で開催されました。図録を刊行しています。先の戦争が終わってから70年が経過し、戦争を知らない世代が総人口の8割を超え、戦争は遠い過去の出来事として記憶も風化しつつあります。戦争体験者が減少する中、戦争で得た様々な教訓をいかに次世代へ継承するのかが、私たちの大きな課題となっています。鳥取県立博物館では、戦後50年を契機として1995年に県内の戦争関係資料の調査を始め、これまでに3000点を超える資料を収集しました。今回、戦後70年を節目として、この20年間に収集した資料のほか、県内外の戦争関係資料をもとに、1931年に勃発した満洲事変から1945年8月15日の終戦までの間における鳥取出身の将兵や郷土部隊、銃後の県民生活、戦時下の子どもたちの姿を展示していました。また、2014、15年に行った調査の成果をもとに、今後、口頭伝承などが困難となる戦争の記憶を伝えるものとして重要性が増すと思われる「戦争遺跡」として、県内の旧軍用地や戦争記念碑なども紹介していました。本展を通じ、戦争を遠い場所で起こった過去の事件でなく、私たちの身の回りで起こった出来事ととらえることで、戦争の惨禍や平和の尊さを足元

から見つめ直す契機とするために開いたものです。構成は、第1章 明治・大正の戦争と鳥取、第2章 郷土部隊の創設・編成、第3章 昭和の戦争と鳥取、第4章 戦時下の暮らし、第5章 戦時下の子ども、第6章 玩具や本から見る当時の世相、第7章 戦後の暮らし、第8章 鳥取県内の戦争遺跡 でした。

関連して、喜多村理子（新鳥取県史専門委員、松江市史専門員）さんの講演「徴兵制と青年」が12月6日に、石田敏紀（鳥取県立倉吉高等学校教諭）さんの講演「鳥取県への学童集団疎開」が12月12日に、篠田建三（伯耆文化研究会）さんの「美保飛行場周辺の戦争遺跡」、岩佐武彦（伯耆文化研究会）さんの「米軍の米子地方空襲」、大嶋陽一（鳥取県立博物館職員）さんの「鳥取県内の戦争遺跡」の、3人の報告会が12月20日に、12月5日に山本茂雄（鳥取敬愛高等学校講師）さんを講師とする音楽鑑賞会「蓄音機コンサートー当時の流行歌を聴く」が、それぞれ講堂で開かれました。

Tel : 0857-26-8044 Fax : 0857-26-8041
<http://site5.tori-info.co.jp/p/museum/exhibition/planning/36/>

鳥取県立公文書館

戦後70年記念事業「子どもたちの戦闘配置」に関する学童集団疎開のパネル展示が2015年8月11日～8月末の会期により1階ロビーで開催されました。あわせて、神戸からの学童集団疎開、満蒙開拓青少年義勇軍と関連する館所蔵資料や関連書籍なども展示していました。

Tel : 0857-26-8160 Fax : 0857-22-3977

<http://www.pref.tottori.lg.jp/251002.htm>

出雲弥生の森博物館

秋季企画展「いつまでも戦後でありたい-出雲市民と戦争」が2015年10月31日～12月21日の会期で開催されました。「戦後何年」という言い方がずっと続いて欲しい、これは1945年生まれの吉永小百合さんの言葉です。年齢＝平和が続く年数との思いです。今年は、先の大戦の敗戦から70年という節目の年です。出雲市（旧出雲市）は太平洋大戦の直前に誕生しました。1941年11月3日「出雲市」が設置され、市議会選挙開票翌日が12月8日。開戦を告げる臨時ニュースが流れた日でした。あらためて、郷土と戦争との関わりを考えるために開かれた企画展でした。主な展示品は、兵役抽籤くじ、大阪真田山陸軍墓地墓標の写真、平田愛宕山と斐川興林寺の記念碑および北浜ロシア兵墓標の写真、隠岐の島町の明治時代監視哨跡出土遺物、斐川段原鉄橋の弾痕の写真、松江大橋陶製擬宝珠、北浜防空監視所跡出土遺物、亡き父を追悼する石碑などでした。

企画展関連講演会が、11月22日に原田敬一（仏教大学歴史学部教授）の「戦争遺跡・遺物から見えるもの」が、12月13日に佐伯純也（米子市文化財団埋蔵文化財調査室）さんの「本土決戦に備えた陣地を掘る -「チ号演習」関連遺構の調査」が、それぞれたいけん学習室で開かれました。

ギャラリー展「発掘された戦争遺跡ー地下の遺構やモノが語る戦争」が2015年9月30日～2016年2月1日の会期で開催されました。戦後70年を迎え、2015年は「戦

争」について考える行事や展示が各地で行われ、平和・不戦の思いを再認識する一年となりました。そうした中、減少していく戦争体験者に代わり、「戦争」の様相を伝える場として戦争遺跡の保存活用を図る動きが広がっています。一方で、戦争遺跡の評価をめぐっては課題も多く、埋蔵文化財として調査された遺跡は多くありません。今回の展示では、遺跡が伝える「戦争」を感じてもらうために、埋蔵文化財として調査が行われた全国の戦争遺跡を取り上げていました。

Tel : 0853-25-1841 Fax : 0853-21-6617
<http://www.city.izumo.shimane.jp/www/contents/1244161923233/index.html>

広島市郷土資料館

特別展「広島市民と戦争」が2015年10月17日～2016年1月11日の会期で開催されました。図録を刊行しています。1938年3月、日中戦争で戦死された一広島市民の出征から戦死・葬儀に至る一連の資料、黎明期の広島ラグビー界に関する写真など約150点を展示して市民と戦争の関わりを紹介していました。

Tel : 082-253-6771 Fax : 082-253-6772
<http://www.cf.city.hiroshima.jp/kyodo/html/0Otop/topfrm.htm>

のこのしまアイランドパーク：福岡市

出征した兵士が戦地から家族に宛てた絵手紙を展示する「家族への愛の手紙」が2015年8月～通年で開催されました。

Tel : 092-881-2494

http://www.fukuokabrand.com/bbs_datas/detail/415

ゼンリン地図の資料館：北九州市・福岡

戦後70年企画「地図に刻んだ戦災。地図に描いた希望。」が2015年7月21日～2016年3月31日の会期で開催されました。本企画展は、資料館所蔵品の中から「東京」「名古屋」「大阪」「北九州」の4都市を選び、戦中・戦災・戦後復興の3つのカテゴリで全19点を公開していました。戦争のリアリティと戦後の力強い復興を、地図が果たした役割とともに感じられる企画展でした。1945年に作成され、日本の都市エリアを網羅した25万分の1の地図の第2版で、海軍関係者のみで使用できると明示されており、軍事目的の地図であることがわかる「旧米国陸軍地図局作成の都市図－CENTRAL JAPAN」、第一復興省が1945年に作成し、復興の一步だけでなく、留守宅の状況を知りたい復興兵士や引揚者が被災状況の把握のために求めた地図でもあった「全国主要都市戦災概況図」や、東京・大阪・名古屋の大都市で独自に作成された詳細な戦災焼失図、幹線道路や地域指定なども示されている、1946～47年に作成された復興都市計画図が、主な展示品でした。

Tel : 093-592-9082
<http://www.zenrin.co.jp/mapgallery/special.html>

小城市立歴史資料館：佐賀

「小城の戦時資料展」が2015年7月11日～9月6日の会期で開催されました。千人

針、衣料配給切符、陶器製湯たんぽ、太平洋戦争末期に造成された「滑走路」に関する資料など、小城市内に残る太平洋戦争関係の戦時資料を展示していました。

Tel : 0952-73-8809 Fax : 0952-71-1145
<https://www.city.ogi.lg.jp/main/17931.html>

宮崎県文書センター：宮崎市

「忘れまい戦後 70 年一遺跡と資料にみる戦渦の中の宮崎」が 2015 年 7 月 21 日～8 月 31 日の会期により開催されました。次の 4 つの構成でした。1) 引き返せない大戦への歩み、陸軍飛行場用地となった場所には文化財史蹟に指定された古墳がありましたが、それらは撤去されたり移転改葬されたりしました。また、飛行場用地の整地作業などに県内の小中学生も動員されましたが、その様子を史料から具体的に紹介していました。2) 今に残る戦争遺跡、児湯郡川南町には戦時中に「空挺部隊（落下傘部隊）」の基地があり、部隊の施設の一部である給水塔が今も残っています。寄贈された給水塔設計図や写真をもとに紹介し、今も残る戦争遺跡が背負ってきた歴史をふり返っていました。3) 戦時中の暮らし、国家総動員法の下で宮崎県民も貧しい生活を余儀なくされましたが、暮らしに直結した節米運動や配給制度、武器生産のための金属類の非常回収、戦費調達のための貯蓄奨励、戦時債券などについて史料をもとに紹介していました。4) 県内の罹災状況と県民生活への影響、本県でも多くの方が罹災しました。終戦直後にアメリカ軍が撮影した航空写真とともに、主な市町村の罹災状況を紹介していました。また、軍事公債（戦争のために

国が国民から借金した証書）の処理によるインフレ下での厳しい生活の様子もうかがえました。

Tel : 0985-26-7003 Fax : 0985-28-8760
<http://www.pref.miyazaki.lg.jp/somu/kanko/bunka/20150723181137.html>

沖縄県平和祈念資料館

第 16 回特別企画展「戦後 70 年伝え残す記憶 ウチナーンチュが見た戦前・戦時下の台湾・フィリピン」が 1 階の企画展示室で 2015 年 10 月 9 日～12 月 10 日の会期により開催されました。70 年前、戦艦に海を覆い尽くされ、激しい艦砲と壮絶な地上戦のなか、沖縄は悲惨な運命をたどりました。同じころ故郷を離れ、海の向こうで暮らすウチナーンチュにも悲劇がありました。本年度の特別企画展では昨年度に続き、沖縄戦から視点を広げ、多くのウチナーンチュが移り住み、戦争に巻き込まれていった「台湾」と「フィリピン」の戦前・戦時下の様子について紹介していました。その時代を生きた彼らの過酷な体験を知ることにより、今を生きる私たちの生活と平和の尊さを実感し、今後も平和で豊かな文化を創造していくことに繋がるような構成となっていました。

第 4 回子ども・プロセス企画展「憲法のない島-米軍統治下の沖縄と人権」が 2015 年 12 月 4 日～2016 年 2 月 14 日の会期で開催されました。アメリカ軍統治下の沖縄と人権について学ぶことで、基本的人権の大切さについて考え、人権尊重のこころを育む機会にするものでした。

Tel : 098-997-3844 Fax : 098-997-3947
<http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp/>

海外の平和博物館ニュース

海外の平和博物館ニュースは INMP（平和のための博物館国際ネットワーク）のホームページで日本語で読むことができます。しかしそこに載っていないニュースをご紹介します。

ブラッドフォード平和博物館： イギリス

2015 年 12 月には、1937 年スペインの内戦を逃れた子どもの難民に関する展示をしました。例えばゲルニカの空襲を避けてイギリスに避難した子どもたちがいます。今日の難民問題を考える上で貴重な展示となりました。5 歳でイギリスに避難し、その後ずっとイギリスに住み続けたマリア・ルイサさんも参加しました。

第一次世界大戦におけるクラウザー兄弟に関する展示では、兵役拒否をしたフレッドと兵士になったエリックの選択について、子どもたちはワークショップで議論をしました。

また 2016 年にイギリスが EU の残るかどうかを問う国民投票を前に、ヨーロッパにおける協力の歴史に関する展示やワークショップをする予定です。

開館日時：木曜日の 10:00-16:00

その他は予約をして訪問して下さい。

Peace Museum: 10 Piece Hall Yard,
Bradford

www.peacemuseum.org.uk email:

info@peacemuseum.org.uk

twitter: @peacemuseumUK tel: 01274
780241

（詳細はブラッドフォード平和博物館のホームページをご覧ください。文責：山根和代）

出版物のお知らせ

『平和のために捧げた生涯 ベルタ・
フォン・ズットナー伝』（明石書店）

ブリギッテ・ハーマン 著

糸井川 修、中村 実生、南 守夫訳

19 世紀オーストリアの小説家で平和運動家として知られたズットナーの波乱に満ちた生涯を、『エリザベート』で知られるブリギッテ・ハーマンが描く。第一次世界大戦が起こる 20 年以上前から近代戦争の悲惨さを認識し、「武器を捨てよ！」と主張し続けたズットナー。周囲から理想主義者と冷やかに評価され続けても、その主張を曲げることはなかった。1905 年、女性で世界初のノーベル賞を受賞。



『サンタになった魔法使い
—ドクター・カナイと仲間たち—』
文 網島洋一、絵 阿部夕希子
中西出版 2011

『見えた 笑った 難民にメガネを
金井昭雄物語』
網島洋一著 柏艚舎 2007

英語版 Muse の 海外における反響

オランダ戦争・ホロコースト・大虐殺研究所の研究員のエリック・ソーメルズ博士(Dr. Erik Somers)からメールで、次のようなお便りがありました。

本日ミューズの英語版を読みましたが、毎回英語版を作成されるという素晴らしい活動をされていますね。英語版ミューズの編集後記に「この Muse は、世界の人々が日本における平和のための博物館でどのような活動をしているかを知る窓の役割を果たしている」と書かれていましたが、私は本当にそうであると思います。私は日本の平和博物館の活動が素晴らしいことに気付きました。(ところで国際平和ミュージアムのイベントは、本当に興味深いですね。) 翻訳者のみなさんの努力に心よりお礼を申し上げます。私は大変注意深く Muse を読みました。

ご支援のお願い

現在のところ翻訳者の皆さんにはボランティアで翻訳をいただいています。しかし翻訳の量が増えていますので、会費の2000 円以外に今後カンパをしていただけますと少額でも翻訳者の方々へお支払いできと思います。ご協力をよろしくお願い致します。



おしらせ
第9回国際平和博物館会議
2017 年 4 月 10 日~13 日

イギリス・北アイルランド
ベルファスト

メインテーマ

「平和のための“生きた”博物館としての都市」です。発表の締め切りは2016 年 11 月 1 日で、日本からも参加しやすいように、第 8 回会議(ノグンリ・韓国)の場合と同様、通訳・翻訳体制などを工夫したいと思います。

参加意欲をお持ちの方は INMP 日本事務局にお問い合わせください。